ライフヒストリーと生涯学習

ガストン・ピノー

Life History and Lifelong Education

Gaston Pineau

向かいあう生涯学習

（机と椅子の配置を講演会形式から対面式へと変更した後で、参加者一人ひとりに自己紹介をしてもらった。）

どうも皆さんありがとうございます。いま皆さんは、まさしくちょっとしたライフヒストリー、人生の物語を行ったということになります。すごく、とまどっている方もいたようですし、とても難しいことと思われた人もいらっしゃるかもしれません。しかし、私には皆さん、それぞれの人格とか、多彩な面を垣間見ることができました。

それぞれの個人のお話というのが、集団的に得られるものとして成り立っている場合もあります。もしかしたらみなさんは、帰る際にお互いに、先ほど問われた質問の答えを交わすことができるかもしれません。でも、私にはそれはできません。それが可能になったのは、皆さんの協力によって、このように配置を変えていただいたからです。

それは、空間、こういった場所の中でのものの「配置」dispositionの重要さを象徴しています。生涯教育のうちで改革の第一の改革と呼べることは、成人、おとなたちが対面しあうface to faceということでした。上から下へと伝達される教育の関係から、対等な立場に立っての関係を作っていく、といったものが先ほど述べた改革の一つです。

今日あなたたちのお話を聞きながら、私の中で、前平氏と30年前生涯教育といったことの話をし始めたころのことを思い返しています。ここにいる方々は25歳、30歳から最年長であるかもしれない私 —— 私は70歳なんですけど —— など多様な年齢を含んでいます。そこには50年間の仕事や仕事をしていない期間、また50年間の家族・家庭といったものを含んでいます。

またわれわれが女性であるか、男性であるかによって、とても異なった体験・経験をもっています。ずいぶんと前に出版されたこの本が今でも有効性をもつとすれば、それは、マリー＝ミッシェルが女性であって、私自身が男性であること、そして私は大学の教授であって、彼女は主婦であることにもかかわらず、つまり性別や体験や社会的な位置の異なる人間同士が作り上げた作品であることです。

再生産ではない「人生の創造」

私たちが出会ったきっかけというのは、彼女が成人教育の講座を受けにきていたことでした。それは私が主催していたものなのですけれど、私はその当時どうしたら学校的なscolaire教育

でないことをできるかということを考えていました。

多くのおとなが学校を出たとき、その学校教育というものが嫌いだったと言います。10歳の時に嫌いであった学校教育に、再び出会わないようにするにはどうしたらよいか。私たちがやっている生涯教育というものが、学校教育的なものと化さないように、常に日々新しい方法を探してやってきました。

もしも生涯教育というものが、学校教育と同質なものであれば、それは生涯にわたる疎外ということになります。そういうわけで、私の最初の著作のタイトルは、「生涯にわたる教育は、生涯にわたる疎外か（Education ou aliénation permanent?）」というものになりました。

だから生涯教育にとっての新しい方法を見つけるという課題は一番最初に来なければいけないと思います。もしも新しいそういった方法を見つけたら、おとなは自律することができますが、しかし見つからなければ、ずっと今の学校教育と変わらないところに、おとなにとどめてしまうことになります。ですので、人生の創造というのは人生の再生産ということではなくて、あくまで自分の人生の創造であるということです。

最後に強調したいのは、教育ではなくて自己教育、自分自身による自分の教育ということです。とりわけ、自己教育と自伝というのが、自分の人生を創造するための方法として、とても重要だということです。

マリー ＝ミッシェルとの出会い：私的な人生が公の場で語られるということ

再び先ほどお話ししたマリー・ミッシェルの状況と、私自身の状況について話を戻したいと思います。その時、どうすればいいかと考えて、今皆さんにとってもらったこういった（机を丸く囲む）配置をとりました。

そして皆さんに先ほどしてもらったような、自分の教育の物語、今に至るその自己教育の物語を、短いものですが、してもらうようお願いしました。しかし、最初はまったくの沈黙でした。なぜ沈黙だったかというと、こういう風に座席に座って、教師を目の前にして、まるで学校教育の時のような姿勢でいたからです。しかし、勇気のある人たちが、勇気を出して、言葉を発して、それは創りあげるといった作業に変わっていったのです。

私の主催したその成人教育のコースでの例をお話しします。ケベック州の工場で働いていた労働者がいましたが、その労働者は森の中で６か月働き続ける仕事があり、その時の孤独感について話しだしました。３５歳の主婦は、その家族や家庭内で感じていた孤独についても、いろいろと話してくれました。その他には、３０歳の無職の男性が、自分が無職にいる状態について話していました。あるいは６５歳ぐらいの男性もいまして、彼は自分の孫に自分自身のそれまで生きてきた生涯の物語を語りたいということを言っていました。

しかし、この状況では、マリー＝ミッシェルは話すことができませんでした。なぜかというと、感情的に、もうしゃべれないと、心を閉じるような心境になっていたからです。「私はそのような公の場publicで自分自身の人生の話なんてできない」と。自分自身のライフヒストリーを書くという集まりが何度かあったらしいんですが、マリー＝ミッシェルは、そのうちの一つの場で書いたものを、その次の週の集まりの時に、持ってきました。けれども書いたものすら、

こうした公の場で読むことはできないと言っていました。

彼女は「私の書いたものを友だちに渡すので、その人に読んでもらってください」と言いました。彼女は「もうその集まりの中には居たくないので、外の廊下に出ています」と。それで、私たちは、「それでいいのですが、あなたが書いたものを読んだときの、集まっていた人たちの反応を録音してとっておきますよ」と伝えました。そしてマリー・ミッシェルの書いたものを読んだ後に、それを聞いた一人ひとりが、それに対して質問を出しました。マリー＝ミッシェルはロッカールームにいて、彼女の友だちが、その文章を朗読して、その反応を録音して、それをマリー＝ミッェル自身がまたあとでそれを聴くということになりました。

語り手と聞き手との相互作用

今の例を通して、いかに自分の人生を語るということが難しいかということがわかっていただけるかと思います。あくまで個人的な、私的な人生が公の場へと、その物語が出ていくのですから。その時に「話すことparler」と「書くことécrire」という、二つの方法があることがわかります。

そしてさらに自分自身、その自分の物語を述べた人が、それに対する反応を聞くことの重要性をわかっていただけると思います。なぜかというと、それがなければ、刑務所などでの、警察の尋問みたいなものになってしまうからです。もしかしたら、一番ここで重要なのは、自分の人生を語る側の人と、それを聞く側の人との間にある相互作用的なinteractif対話になることなのかもしれません。

例えば、今ここにいる皆さんたちが、自分自身の自己教育の話をして下さったように、皆さん方は実に多彩で、いろいろな側面がある―３０歳の若者から、７０歳の老人から、働く者から、実に多彩な面が見えます。それは実に生きることの多様性を表していて、生きることと死ぬことの間の問題であったり、また労働することであったり、労働をしていないということであったり、そういった対照的なものも含めた、その間にもある多様性があるのです。

それはとても多様diversiteであって、とても豊かrichで、複雑に絡み合ったものです。しかし、あまりにも複雑に絡み合っていて、豊かであって、多様であったため、私自身はその場ではどのように分析したらよいかがわかりませんでした。何を言ったらよいのか、どういった反応をすればよいのか、まさに沈黙してしまって何も言えませんでした。各個人個人の豊かな人生、個性あふれる人生を理解するには、その多彩な特別な面を意識して受け入れなければならないと思います。

その初めての表現expressionに直面したときに、どうしたらよいかというのは、ライフヒストリーを話す時に次にふりかかってくる、非常に大きな問題です。第一の難関は、どのようにその人が提示してくる自分の人生の表現を受け入れられるか、寛容に受け入れられるかということであって、その次に来る問題というのが、その第一の表現をどのように考察していくかということです。

そこでは問題になるのは、誰が考えているか、考察している人が研究者なのか、物語を語った人自身なのか、ということです。自己教育における目標は、語り手と聞き手の間の相互作用

なのです。

自分の物語と他者の物語

今から私がお話したいのは、どのようにマリー＝ミッシェルが第一の表現を行ったかということです。私が行っていたコースでは、意外なことを話してくれました。それはそのコースでは、彼らの多様な物語を前にして、何を言ったらよいのかわからないといったところに止まってしまっていたからです。

こういった豊かさをどのように考察していくのかに関する、私のつき当たった壁というのは、実は二回目なのです。一回目は私自身のライフヒストリーを語った時でした。それはあるジャーナリストが私自身の人生を話してくれと言った時に、今送っている人生と学校生活との関係を知るために語らされた時のことです。そのジャーナリストが私に、ライフヒストリーというものを発見させてくれました。

それまでは私は心理学や教育学を専門にしていたのですが、それまで一度もライフヒストリーといった方法を耳にしたことはありませんでした。つまり、ここで認識してもらいたいのは、ライフヒストリーは、以前からそういった方法を採っている人たちが、たくさんいるとしても、ある人にとっては、やはり新鮮な方法であるということです。

ジャーナリストが、まず私が人生を語って、学校と今の人生との間に生じた事柄を分析していこうということを言っていました。私は自分の人生の一部を話しました。その一部というのは今まで誰にも話したことがなかった一番難しいものでした。彼女も私の話をおよそ2時間録音していました。彼女もまた同じような問題に直面していて、その録音した2時間のテープを聴き直して、分析して、省略・形式化・解釈したり、レジュメを作ったりすることができないと言っていました。それで彼女は、あなた自身が（文章化を）やってくれないかと言い出しました。それを記事として載せると言っていました。

そういうわけで、話したことを文章化しようとしたのでしたが、口頭で述べたことと文章とは違うので、なかなかうまくいきませんでした。それでも5頁は書くことができました。研究者である私自身にとっては出版されることがとても大切だったので、その5頁を送ることにしました。送った時はうれしい気持ちで一杯だったんですけど、すぐに送ったものが返されてきて、それは出版できないと言われました。

理由は、私の書いたことが、余りにも暗すぎる、ネガティブすぎるということでした。それで、文章を出版することができずに、どうしたらいいかということにつきあたっていました。

教育においてライフヒストリーを行う時、自分自身のライフヒストリーを経ていなければならないと思います。自分自身がそういった困難な状況を一度味わっていると、他者に対しても同じ課題を提示したときに、他者が感じることを理解しやすいからです。

［解説］

ちょっと分かりにくいかもしれないので説明をしておきますけれども、今ピノー氏が紹介してくれているのは、現在翻訳中の『人生の創造』という本の第三部にあたります。マリー＝ミッ

シェルというひとりのカナダの女性が―最初に彼の成人教育の講義にやってきたまったく普通の主婦ですが―書くことでしか表現できなかった彼女が、彼の手助けで、どのようにして書いて、読んで、だんだん語れるようになっていくかという、そういうお話をしているんです。そういう背景を知ってもらえると、理解が進むのではないかと思います。

（前平泰志）

ライフヒストリーの分析方法の探究

さきほど言っていたのは、最初に提示された語りに対して、どう対処すればいいのかというところに、とどまっていました。マリー＝ミッシェルが私のところに戻ってきて、もっと深く考えたい、自分が書いたものに対してと、他者の反応に対しての、考察もしたいということを言ってきました。私自身もライフヒストリーの分析の方法を、もっと深く研究したかったのです。そのときに自己教育についてのライフヒストリーを、研究しました。以前は教育ということに焦点をあてて、教育を目的としたライフヒストリーでした。しかし今回は、私たちはライフヒストリーにアプローチする方法を、さらにシステマティックなものにしていくことを目標としました。

そこでマリー＝ミッシェルと、ちょっとした契約を結んだのですが、それは、どうしてライフヒストリーをやったのかと、これからどのように展望をはかっていくのかというものでした。そして、それを研究の結果として公表することについても、承諾できるかと聞きました。そのような契約、約束をお互いに確認して、研究を開始しました。

そのとき彼女は、自分の言いたいことはまだ終わっていない、それはまだ自分の人生の一部でしかないということを言っていました。その時彼女は35歳だったのですが、彼女が生まれたときから35年間の人生全体についての表現をしたい、というふうに言っていました。しかし彼女は自分自身の人生について提示するのに、一番好む方法というのは、口頭で話すよりも「書く」という方法だったので、それを選びました。

私は「わかりました」といったのですが、彼女は「どうすればいいですか？」と聞いてきました。私はその時どうすればいいのか私もわからなかったですし、そういう時に「どうすればいいか」をあまり性急に提示してはいけない、とも考えました。それは「書く形式」というのが、もしかしたら内容よりも重要かも知れないからです。それぞれの人が、自分自身の形式というものを見つけなければいけないのです。

私がまず彼女に言ったのは、とりあえずまず自分の感情ではなく、「出来事」から書いてくれということでした。今までの強い記憶に残るような出来事はなんだったのかと。そうした出来事から出発して、あまり感情や精神状態のほうに拡散しないようにということを意識して進めていきました。

彼女はそれを書くのに一年かかりました。時間をゆっくりとることが、とても重要なのです。そして時々彼女は、私に「詰まっている。進むことができないので、少し話し合ってもよいですか」という電話をしてきました。そして一年後、文章化された150ページもの原稿を持って、私のところに戻ってきました。その150ページというのは膨大な量です。ライフヒストリーに

おいては、その量というのがよく問題にされます。

相互作用と「人格」の自己教育

彼女はその150ページを渡して、「あとはあなたの仕事です、私はもう休みます」と言って、渡して帰ろうとしました。それはとても古典的な研究の「分業 division」のやり方であって、聞くほうが研究の主体となり、話すほうは分析される対象であるというものです。それこそ私の避けたかったことであり、もっと相互作用的な文章の分析を試みたかったのです。

最初の作業として、文章の分量を減らさなくてはいけないと言いました。構成は問わないので、そのなかで関連できるものを見つけて、その間にある文章で削減できるものはないかと。彼女はその作業を終えて、100ページにして私のところに来ました。そこでは出来事がもっと圧縮された形で、記されてありました。

それでもまだ100ページもあり、その時に私たちが考えたのは、私たちは何を探究しているのか、ということです。そういった困難な状況では、私たちは探究の目的を忘れがちになります。私たちが探究しようとしていたのは「自己教育」であって、彼女自身がどのような自己の形成をおこなったか、ということです。

ですから、その文章の中で「自己教育」を明示するものを探さなければなりませんでした。自己教育とはいったい何なのか、学校での学習なのか、職業的な学習なのか。そこでそういった「学習」とか「理解する」といった言葉に下線を引くように、彼女に言いました。彼女はそれを実行しましたけれど、それは彼女にとっても私にとっても納得のいくものではありませんでした。それで何か別のものではないかということを模索しました。そこで思いついたのが「人格 personnalité」の自己教育ではないかということでした。

そこで相互作用的な分析の図表を作りまして、少し技術的なのですが、文章をコード化して、その記号をまた解釈するといった方法です。その文章のコード化と、そのコードの分析といったことを、二人で一緒に行なって、そのコードの解釈に彼女が納得しているかどうか聞きながら進めました。

こうして、この文章は出版まで進むことができたのですが、こういう作業を一緒にやったので、（著者として）二人の名前が明記されるようになりました。彼女はそれに承諾してくれたのですが、彼女の家族のことも、すべて書いてあるので、少し迷っていました。それでマリー＝ミッシェルというのは彼女の本名ではないのです。

20年目の再会と新たな出発

いずれにせよ、それは彼女にとって社会－感情的socio-affectif、知的―感情的intellectuelle-affectifな冒険であったと言えます。この本を出版するまで、自分のことを公の場で話すことはなかったので、とても彼女は動揺していました。それでしばらく、放っておいてほしい。つまり、それは自分が書いたものを内在化する必要があるからだということでした。それで彼女は本が再版されることを拒んでいました。それで出版されて20年間、私たちは何もお互いに行動を起こすことはなかったのです。

昨年の夏、同僚がこの本を分析しました。彼の分析ではこの中で私とマリー＝ミッシェルの関係性というものが分かりにくかったそうです。そういった一般的な人生を送っている人と、大学の研究者が一緒にパートナーとして作業するのは無理だ、と考えていました。それで私はそうした同僚の批判にこたえなくてはなりませんでした。そこで私はマリー＝ミッシェルに手紙を送って、彼女の意見を聞いてみることにしました。それで20年ぶりに彼女と対話ができて、この20年間彼女が何をしてきたのかを書くことを承諾してくれました。

マリー＝ミッシェルとの作業でよかったことは、私の男性としての自己教育と、彼女の女性としての自己教育というものが違うものであることに私が気づいたことです。今回の作業で、彼女はエコロジー教育、環境教育というものに気付かせてくれました。それは彼女がライフヒストリーのなかで、海辺での経験、海・水とのかかわりといったことを書いていたからです。それは学校的なカテゴリーでは存在しなかった学習です。そこで、私の研究の延長線上で、「物質matériel」についての学習についても研究を進めました。私たちの周りにある空気、水、土（大地）という、三つの物質と私たちの学習について、それぞれの関係を記述した著作を発表しました。残るのは「火」ですが、日本は「日出る処」とも言われています。それで今回の日本での火・太陽との関係について、研究を深めていけるものになれば、と思っています。ありがとうございました。

質疑応答

（質問Ａ）

先生の本の中でマリー＝ミッシェルさんというのは本当に大きな存在なんですが、彼女を選んだ動機というのはなんだったのか、そして最終的に彼女のライフストーリーというのが出来上がって、その先生としての達成感というのはいかがなものでしょうか。どのくらいの満足度というものだったのでしょうか。

（ピノー氏）

私自身が自己教育をみたときに直面したのは、私の「日常 quotidien」ということでした。そこで「日常」こそが自己教育の主たる場であるということがわかりました。普段何も起こってないと多くの人が思っている日常、しかしそこで一番重要なことが起きているかも知れないのです。

マリー＝ミッシェルは仕事をしていなかったし、何かについて勉強していたわけでもありませんでした。彼女の日常の中では、子育てが重要なものでした。それは社会－職業的socio-professionnelleな面からいえば、価値のないものとみなされていました。しかし、その日常の中でこそ、彼女は多大な学習ができたのです。街や地域の集会に参加したり、環境問題にかかわったり、マリー＝ミッシェルが住んでいる街での高速道路建設に反対する行動をしたりしていたのです。彼女自身はそうした多くの人たちの象徴的な存在であって、周りにいる人たちの立場などを代表（=表象）してくれる存在だと思います。

彼女が私にもたらしてくれたものは実に深く様々なことだったのですが、それまで自分が男

性として見ている世界と女性が見ている世界は一緒だろうと思っていたのですが、そうしたジェンダーの観点に気付かせてくれるものでもありました。

この本は自分にとって一番、研究とは、どのようなものであるのかを投げかけた本です。それで絶版になっていたのをとても残念に思っていました。しかし、彼女の意見を尊重して、そのままにしていました。ですから、彼女がまた参加してくれたことは、とてもうれしいことで、それは自己教育と自伝という新たな方法を追求するなかで、相互的なパートナーをもった研究といったものを同時に追求することができたことも、うれしいことでした。

（質問Ｂ）

マリー＝ミッシェルさんの人生が豊かなものであるということに対して、ご自身で、どのように表現したらいいのかをわからなかった時期があるとおっしゃったんですけれども、その部分と、先生ご自身が自分の物語・自伝を明らかにされるということと、関係があるのかをお聞きしたいと思います。つまり、研究の手法として、庶民の平凡な、しかし多様な人生を解釈するためには、自分の伝記的な要素を明らかにするようなスタンスが必要なのかということなんですけれども。

（ピノー氏）

とても深い質問です。第一に関係するのは「日常」です。私が先ほど話した新聞記者に話した内容のタイトルは「自己教育と日常性」というタイトルをつけました。私自身のライフヒストリーを分析したときに、「出来事」から分析を行っていました。そうした「出来事」が生み出す事柄を知らなかったら、そういったものを他者に対して問いかけることもできませんでした。そうした他者が、自分がライフヒストリーを語る上での難しさを、私自身で試みていなかったら、やはり理解しにくい部分があっただろうと思います。

ライフヒストリーは生きたものであって、人間的な側面からみても繊細で、丁寧な扱いが必要なものであるといえます。

通訳：福田悠歩（同志社大学社会学部学生）